

児童の日記に見られる述べ方について（Ⅶ）

——N. W. 児の1年生時の日記に見られる

情意表現・事象表現に注視して——

岡 利 道

1. 研究の目的と計画

研究の目的は、以下のとおりである。児童の自然な書きことばのすがたがあらわれたものとして、日記というものを捉える。一児童の6カ年の日記における述べ方の実態を調査していき、書く内容の盛り上がりを規定するものは何かを探っていきたいと考える。

研究の計画は、次の[A]・[B]・[C]に従う。

- [A] N. W. 児の小学校6カ年の日記における冒頭部分の述べ方についてまとめる
1年生（報告済） 2年生（報告済） 3年生（報告済） 4年生（報告済）
5年生（報告済） 6年生（報告済）

なお、報告済とした部分は、次の論稿として発表している。岡（1994）、岡（1995a）、岡（1995b）、岡（1997）、岡（2000）、岡（2002）の六つである。

岡（1994）では、一児童（N. W. 児→女兒、以下N児とする）の6カ年の日記における述べ方の実態を調査していくことにした。その上で、書く内容の盛り上がりを規定するものは何かを探っていきたいと考えた。本稿では、特に同児の1年生時の日記に見られる冒頭部分の表現に注視していった。第1文には頭括型の述べ方が多いこと、字数が多い日記は、題材（トピック）の面でおおよそ三つの分類ができること（学校・家庭・遊び）についても言及した。

岡（1995a）では、N児の2年生時の日記に見られる冒頭部分の表現について、次のような特徴を指摘した。(1) 2年生時より題をつけはじめた。題にも文意識をもっており、その意味で長いものになったと推測される。(2) 書き出し部分の表現は、「先生あのね、～」が1年生時に続いて主流であり、相手意識が明確である。(3) 冒頭文の文末表現は、やはり1年生時と同様、「～たよ。」「～たね。」が主流であり、担任への報告（是非とも教えてあげたいこと）・確認（共感を求める意味合い）といった意識が依然として強いことが看取できた。

岡（1995b）では、N児の3年生時の日記に見られる冒頭部分の表現について、特徴をまとめていった。例えば、題のパターンでは、名詞形（例、六校時）、文に近い形（例、かくことがない）、副詞＋（何）らしいの形、の3種が新たに出現し

ている（それ以前は2種）。名詞形のパーセンテージが圧倒的に多い。その他、トピック、文末表現等の特徴を指摘した。

岡（1997）では、N児の4年生時の日記に見られる冒頭部分の表現について、特徴をまとめた。明らかになったことは、以下の点である。（1）題のパターンは、前学年と同傾向である。文の形をとるものが特徴的であり、このパターンで書き始められた日記の分量は、他に比べて多くなっている。（2）総字数が多い日の題材についても、前学年と同傾向である。精神的な成長が著しく、よく考えをめぐらせた内容のものが目立った。（3）第1文で扱われている時間の幅が広がっている。

岡（2000）では、N児の5年生時の日記を対象とし、明らかになったことは、以下の点である。（1）題のパターンは、徐々に多様になっている。比喩表現・感嘆の表現等を含むものなどである。名詞形以外のパターンの題がついた場合、分量が多くなる傾向がある。（2）総字数が多い日の題材は、思慮熟考型のもので、特に母親との関係を描いたものが目立った。（3）この児童なりの日記論が確立された。自分にとって日記を書くことは「心の勉強」「先生と自分の学校でやり残したお話」と捉え、書く推進力を確かなものにした。

岡（2002）では、N児の6年生時の日記を対象とし、明らかになったことは、以下の点である。（1）題のパターンは、名詞形のパターン（複合的なものや固有名詞等も含める）が、前年に続き主流であった。（2）総字数が300字以上になる日が212日と、飛躍的に伸びた。題材は、中学受験に関すること、部活動に関することなどであった。（3）第1文の述べ方のひろがりとしては、「朝練」「練習」「日」「力だめし」といったキーワードが、漸層法的（かなり規模の小さいものではあるが）に配置されていくことが挙げられた。

[B] N児の小学校6か年の日記における情意表現・事象表現についてまとめる
1年生（本報告） 2年生 3年生 4年生 5年生 6年生

[C] 総合的考察を加える（他児童との比較もまじえながら）

2. 研究の概要

田中（1985）の論点を軸とし（以下の（1）・（2）・（3）で掲げる。やや長くなることについてはお断りしておかねばならない。）、S児の表現とN児の表現を対比させるという手法をとる（（4）以下）。S児（女児）の1年生時は昭和51年4月から昭和52年3月まで。1年生時の日記記入日数は301日であった。この段階は、母親がそれを読んで、指導言を書くという形が取られている。

（1）S児1年生時の日記の特徴と指導言

S児にとって書きはじめとなる4月から6月にかけて。この時期の日記の特徴としては、次の4点が挙げられている。

- ① その日の出来事の中から複数の事柄を取材する。
- ② 取材した事柄はおおむね1文で概括的に記述する。

③ 1日の日記はそれらの文の羅列からなり、構成意識が感じられない。

④ 事柄に対する感想の記述はほとんどない。

同上の時期に、応援者でもあり指導者でもあった母親がS児の日記の末尾に記入していった指導言の内容を整理すると、次の2点に集約される。

① 概括的な表現部分について、いわゆる「概念くだき」をして事柄の中身を書くことをすすめる。

○ほめられてよかったね。なにをしてほめられたのですか。(4月12日)

○てればはなにをしていたかをかくこと。(5月25日)

② 取材された事柄について感想を書くことをすすめる。

○きしゃにのっておもしろかったとか、ひこうきをみたことなどもかきなさいね。(6月12日)

○じぶんのおもったことや、たのしかったことなどをかくといいですね。(6月15日)

特に、2点目の感想を書くように仕向けたことは、S児の日記を大きく変容させる契機となったとのことである。

(2) S児の情意表現の成長

S児がすごした1年生時1学期における特徴としては、以下のことが指摘されている。情意を表す「よい」ということばに関わって、「～よかった」という言い回しが見られ、一つの類型的表現となって、1学期中、頻繁に使用されたということである。母親の指導言の中によく用いられていた「ほめられてよかったね」などの言い回しを真似したということも考えられる。例は以下のとおりである。

○おとうさんがはやくてよかった。まきちゃんとおちゃんとわたしとかるたをしてよかった。(6月16日・抄出)

○きょうは、がっこうですとがーまいあってよかった。うみにいってちいさいさかなやえびがいっぱいいておもしろかった。しゅうじでした。(6月17日・全)

2学期、3学期にかけてのこととしては、同様の文脈のものが、上記の「よかった」から「おもしろかった」や「うれしかった」に置き換えられていくことが明らかになった。以下のものが好例である。

○きょうは、学校が三こうじでした。かみでいろんなものをつくりました。

とてもおもしろかったです。きょうは四じ三〇ぷんにおとうさんがかえってきました。とてもうれしかったです。(3月5日・抄出)

ここで、S児の1年生時の日記におけるこれらの語の使用実態を月別にまとめると、表1のようになる。

表1 S児1年生時の情意表現語の使用状況

	よい	うれしい	おもしろい	たのしい	計
4月	2	1	1	2	6
5月	0	0	0	0	0

6月	15	0	2	0	17
7月	22	0	1	0	23
8月	1	0	4	1	6
9月	6	0	3	5	14
10月	5	2	0	1	8
11月	1	2	0	0	3
12月	1	0	3	1	5
1月	1	4	4	0	9
2月	0	4	10	1	15

これによると、6、7月の間、S児の「快」の方向の情意表現は殆ど「～てよかった」によってなされていたことがわかる。9月になると、次第に「おもしろい」や「たのしい」に移行する。事柄の把握が一段と具体的になったと思われる。

逆に「不快」の方向の情意を表わす形容詞は、1年生の間には「つまらない」と「さびしい」とがそれぞれ2回ずつ使用されたただけであった。「不快」の方向の情意を引き起こすような事柄は、1年生の間は日記に取材されることが稀であったようである。

表2には、S児が5年生までに使用した情意を表す形容詞を、初出学年毎にまとめて示している。これによると、2年生以降の初出語の大部分が「不快」の方向の意味を持つものであることがわかる。S児の精神生活が広がって、そういう方向の情意をもたらす事柄も日記に取材されるようになってきたことを示すのであろう。

表2 情意を表す形容詞の初出学年

1年	うれしい、面白い、楽しい、つまらない、さびしい、欲しい
2年	おかしい、えらい（辛いの意）、悲しい、こわい、めんどくさい、おそろしい、くやしい、はずかしい、待ち遠しい
3年	つらい、たいがい ¹⁾ 、惜しい、もったいない
4年	おっかない、苦しい、名残惜しい、はがゆい、有難い
5年	てれくさい

(3) S児の事象表現の成長

1文の中に多くの事柄を盛り込む傾向が強く、構文力が十分でないこの段階では、まず、対象を二文またはそれ以上で捉えさせることが具体的な指導目標の一つとなるだろう。1学期の間、106日の日記の中でS児は合計292項の事柄を取材しているが、この内、2文以上で記述されているのはわずか29項にすぎなかった。これは全体の約10%である。それが2学期になると30%に上昇する。

S児にこの飛躍をもたらしたのは何であったか。それには、彼女が、夏休みの間、絵日記を書き続けたことが役立っているように思われる。絵日記は通常、1日の出来事の中から一事項にしぼって絵を描き、その絵に見合う内容の文章を

加える作業であると言える。ここでS児は、絵に取り上げた事柄に見合うように文章を仕上げるために、「きょうはよこたにきました。おはかまいりにきました。おもしろかった。」(8月15日・全)のような、2文以上を重ねる表現や、「きょうはせみとりにいったらこじまぐんのいえのきにせみが四ひきとまっています。」(8月11日・全)のような、1文に多くの事項を盛り込む表現をとる必要に迫られることになったものと考えられる。8月中、S児の日記では51事項が取材され、そのうち16項が2文以上で記述された。これは全体の30%である。S児の場合、日記の取材事項を一つにしぼる(焦点化する)という外的な要請が、結果として彼女に、概括的表現を「くだく」力を養うことになったと言えるのではあるまいか。(ちなみに、取材焦点化の方法としては、日記に題をつけさせることなどによっても同じような効果が期待できよう。)

さて焦点化された事項を複数の文で叙することが多くなると、それらの文をつなぐ接続詞の使い方が問題となる。1年生の間にS児が使った接続詞は『分類語彙表』の区分でいうと、次の表3のような初出の状況となる。

表3 接続詞(『分類語彙表』の区分による)の初出学年²⁾

1年	累加、展開、反対、理由
2年	選択、同帰
3年	転換
4年	補充

各分野の接続詞がこうして徐々に出揃っていく様相は、おそらく児童の文章構成力の成長の跡を映し出していると考えられる。

(4) N児1年生時の日記の特徴と指導言

このところ(上記(1)の内容)に関して、N児の場合は、担任教員の計画により、書きはじめが5月となる。S児よりも約1カ月遅れるところに一つ目の違いがある。

ノートについて触れておくと、1ページが10文字で7行のものであった。さらに違いの二つ目となることなのだが、絵日記の形式を取っているのである。S児は夏休み中が絵日記の形式となっている。ノートの上段(5文字で7行分)に絵を、下段(やはり5文字で7行分)に文(文章)を書くことになる(ただし、月日は上段の右上隅の1マスの中に例えば5/18と入れる約束である)。従って、最大35マス(文字)の中で記すという条件になるのである。1文の表現とならざるを得ないだろう。

実際の例である。5月18日のN児の日記。絵は、鉢植えの上の方に、朝顔の双葉が三つ描かれているものである。文は、絵と対応し、「あさがおのめがふたつだったのにみつになった」である。小字の「っ」は、後から書き足したと思われる。家族の助言であろうか。教員の加筆ではない。教員は、指導言として、感想や励ましの言葉を多用していき、日記の記述方法に関しては全くと言っていい

ほど指導の言葉を記さないでいるのである。そのような方針であった。ここが、違いの三つ目となる。教員の言葉（コメント）は、「わあ、よかったね。よつめもでるかもしれないよ。ようくみとこうね。」である。つまり、教員としては、学校ではできなかったお話しをするようなつもりで、言葉を書いていくのである。一貫して共感型の言葉である。

そのことにより、N児の情意的な表現を誘い出すことができたと考える。書きはじめて3日目（5月20日）には、はやくも「～よかった」が、その翌日には「～うれしかった」がそれぞれ出現した。違いの四つ目と言えるだろう（これについては、次の（5）で触れる）。およそこれら4点が、二人の児童の違いとして考察できる。

さらにつけ加えると、担任教員の指導言については、日記の記述方法的な内容は殆ど記されていないと述べたが、1年生時では唯一、9/2「もうすこしきれいにかくといいよ」があるのみである。共感し、同調し、お話しすることを楽しむ内容で全体をとおしている。しるしをつけることでは、上手な表現にサイドラインをひくということ、全体的によく書けているという場合に花丸や三重丸をつけるということがなされている。

その教員の言葉の文末表現に注目すると、以下のようにまとめることができる。全体的には、「～ね（え）」「～よ」「～な」の間投助詞群が多用され、まさに共感し、同調するということが中心となっている。さらに、コミュニケーション（返事）を誘う意味合いのある「～かな」も比較的多く使われている。

文末表現別にまとめてみる。5月から7月（夏休みに入る前の7/21）までのところで見えてみることにする。なお、「別」がついているところは、同日にN児がまた新たに書き足したものであることを表す（原文に同日の日付が入っている）。数字は月日である。

「～ね（え）」（間投助詞） 32例

5/18、5/19、5/21、5/25、5/29、6/5、6/9、6/10、6/11、6/13、6/14、
6/20、6/21、6/26、7/1、7/2、7/2別、7/3、7/4、7/5、7/6、7/8、7/12、
7/14、7/14別、7/15、7/16、7/17、7/17別、7/18、7/18別、7/19

「～よ」（間投助詞） 9例

6/2、6/3、6/4、6/16、6/23、6/27、7/10、7/11、7/13

「～な」（間投助詞） 1例

7/7

「～かな」（疑問の助詞「か」+間投助詞「な」） 11例

5/20、5/26、5/27、5/28、6/6、6/8、6/12、6/18、6/22、6/25、7/3別

「～の」（終助詞） 3例

6/15、6/19、7/17別

「その他」 10例

5/31（～たのしそう）、6/7（～かめかめは…歌の一節）、6/24（～すごい）、
6/28（～ありがとう）、6/28別（～すべりだい）、月日不明（～ひいてみて）、
7/4別（～どれっしんぐ）、7/15別（～すごいや）、7/17別（～きれいで

しょ)、7/18別(～おいしそう)

N児は、担任教員を心から信頼し、自分の心の中を包み隠さず綴っていった。それを誘発する強い磁力のようなものを、上記の教員の言葉の端々から読み取ることができる。

もう一つ、どうしても触れておきたい点がある。この担任教員のように、児童のものの見方や考え方のよい面を称揚し、育てていく日記指導の有効性については、早くから亀村(1971)において主張されてきたこと³⁾である。少なくともこの担任教員とN児との関係は、亀村の求めている理想的な姿に他ならないと考える。

(5) 情意表現をめぐる

先の表1の結果に、N児の同様な情意表現語を重ねてみる。

表4 上段：S児1年生時の情意表現語 下段(太字)：N児1年生時の情意表現語

	よい	うれしい	おもしろい	たのしい	計
4月	2	1	1	2	6
5月	0	0	0	0	0
	2	2	2	0	6
6月	15	0	2	0	17
	2	2	4	2	10
7月	22	0	1	0	23
	2	3	6	0	11
8月	1	0	4	1	6
	0	1	1	0	2
9月	6	0	3	5	14
	0	2	2	1	5
10月	5	2	0	1	8
	0	6	9	5	20
11月	1	2	0	0	3
	3	1	1	1	6
12月 ⁴⁾	1	0	3	1	5
1月	1	4	4	0	9
2月	0	4	10	1	15

なお、上記の4種の語以外の情意表現語として、N児は、次のような使用もしている。

つまらない…5月(1例) 7月(4例) 8月(1例) 9月(2例) 11月(1例)

おもしろくない⁵⁾…5月(1例) 8月(1例) 10月(1例)

さみしい…6月(1例)

ほしい…7月（1例） 10月（1例）

くやしい…10月（1例）

おかしい…10月（1例）

おいしい…11月（1例）

若干の揺れはあるものの、S児の「～てよかった」型から「おもしろい」「たのしい」型に移行する動きとN児も同調していると言える。(4) のところで触れた二人の児童にとっての「違い」(差)は、この段階ではほぼなくなっていると感じられる。

先の表2に、N児の初出の結果を重ねると次のようになる。

表5 情意を表す形容詞の初出学年（下線の語はN児1年生時に出現したもの）

1年	<u>うれしい</u> 、 <u>面白い</u> 、 <u>楽しい</u> 、 <u>つまらない</u> 、 <u>さびしい</u> 、 <u>欲しい</u>
2年	<u>おかしい</u> 、 <u>えらい</u> （辛いの意）、 <u>悲しい</u> 、 <u>こわい</u> 、 <u>めんどくさい</u> 、 <u>おそろしい</u> 、 <u>くやしい</u> 、 <u>はずかしい</u> 、 <u>待ち遠しい</u>
3年	<u>つらい</u> 、 <u>たいがい</u> 、 <u>惜しい</u> 、 <u>もったいない</u>
4年	<u>おっかない</u> 、 <u>苦しい</u> 、 <u>名残惜しい</u> 、 <u>はがゆい</u> 、 <u>有難い</u>
5年	<u>てれくさい</u>

1年時における6語は、両者とも見事に重なる。

また、S児は2年時に「おかしい」「くやしい」が、3年時に「惜しい」が、それぞれ初出であったが、N児の初出は1年時であることから、情意表現の使用の面では、N児が若干豊かな様相を示していたと見ることができよう。

(6) 事象表現をめぐる

上記の表3の接続詞（『分類語彙表』の区分による）の初出学年を、N児に当てはめると、「1年生時に累加、展開、反対、理由の接続詞が出現する」ということは、ぴったりと一致する。具体的に示すと、以下のようになる。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
累加 それから				1	4		2	7
展開1 それで			7	1	3	14	9	34
展開2 そうしたら							1	1
反対1 でも			2			14	2	17
反対2 それでも						1		1
理由 なぜかとゆうと ⁶⁾					1	3	1	5

『分類語彙表』によれば、理由の接続詞（4.11接続）としては、「なんとあれば」「なぜなら」「だって」が挙げられており、1年時ならば、「だって」がふさわしいが、表3に挙げたように、N児は「なぜかとゆうと」を使用した。「なぜなら」を、低学年の子どもらしい言い回しにしたものと言えるだろう。

(7) 総字数の多い日記における表現をめぐって

岡(1994)でも特筆したが、通し番号60の7月17日分は、センテンス数が見かけでは二つ・実質は五つであり、585文字で、その時期としては格段に多いものである。

先に見た情意表現については、最後の部分に出現している。主題からはズレており、無理につけ足したものと見られる。事象中心で、緊迫感がみなぎっている。逃れようのない切迫感が伝わってくる。母親の病状に関わる大変な経験を、ほぼリアルタイムに綴っている。

切実な思いがあふれ、「それで」という初出の展開の接続詞を、ただたどしさもある中で4度ほど使用している。それまでは2度ばかり同語を使っており、他の累加・理由はまだ使用していない。反対1の「でも」が2回出現している。「それで」を使わざるを得ない状況の下、出るべくして出た表現であろう。家族それぞれに向けるまなざしが微妙に違っていることも、見逃せないものである。

通し番号60の文章表現は、この時期の児童の指導に示唆的な要素を多く含んでいると見ていい。ここで、その表現を確認しておきたい。表記は原文のままとし、接続詞には下線を付すことにする。マル付き数字はセンテンス数(累計)、右下の小字の数字は字数(累計)である。

7/17

せんせいあのね。

①おか₁₀あさんが、あたまがい₂₀たくなってそれでさん₃₀かいもはいてよるび₄₀ういんにいってわたし₅₀まおかあさんがしんぱ₆₀いできしました。②それ₇₀でおかあさんがしんぱ₈₀いたったからむかいに₉₀いこうかとおもったけ₁₀₀どやめておふろにはい₁₁₀ってごはんをたべたら₁₂₀おかあさんが、かえつ₁₃₀てきてしんぱいしてた₁₄₀よっていたらおかあ₁₅₀んがいつものびょうき₁₆₀だっていたから、わたし₁₇₀しはあんしんしてあの₁₈₀ねちょうをかいてたら₁₉₀おばあちゃんが、ふと₂₀₀んをしいてあげなさい₂₁₀っていってそれでしい₂₂₀てから、ふたつめのあ₂₃₀のねちょうをかいてお₂₄₀じいちゃんかねむたい₂₅₀っていってもやきゅう₂₆₀をみてるからやっぱり₂₇₀ねむたくないのかな③で₂₈₀もおばあちゃんは、お₂₉₀かあさんがあらいもの₃₀₀をできないからおばあ₃₁₀ちゃんがやっていて、₃₂₀おじいちゃんがくだも₃₃₀のは、またかってうる₃₄₀さくてあのねちょうが₃₅₀いいぐわいになんか₃₆₀ておじいちゃんがてれ₃₇₀びをみながらねむって₃₈₀いっていびきをかいて₃₉₀うるさくてあのねちよ₄₀₀うがめちゃくちゃにな₄₁₀りそうで、もうやだ④そ₄₂₀れ₄₃₀であのねちょうをか₄₄₀いてるときふるうつ₄₅₀すいかかておじい₄₆₀ちゃんとわたしだけ₄₇₀っておばあちゃんは、₄₈₀たべなくてわたしは、₄₉₀かおたべてでもおばあ₅₀₀ちゃんは、せんたくも₅₁₀んをたんでわたし₅₂₀は、あのねちょうをい₅₃₀ぱいかいてせんせいに₅₄₀おしらせしたくてかい₅₅₀てくす⑤はなびをして₅₆₀あそんでおもしろかつ₅₇₀すいかをたべながら₅₈₀あのねちょうをかいて₅₈₅よかたよ。585

先の(1)で、4月から6月にかけて、S児のこの時期の日記の特徴として挙げ

られた4点のうち、N児の場合、殆どがあてはまるのだが、最後の「④事柄に対する感想の記述はほとんどない。」があてはまらない。岡(1994)でも触れたように、総字数の多い日の題材(トピック)に関しては、「家庭生活(家族)と関わりがあるもので、自分にとってショックだったこと(アクシデントも含む)や目新しい体験などを伴っている場合のことである。」に、この7月17日の日記はあたる。さらに、これまでに築いた担任教員との信頼関係の中で、正直に自分の思いを吐露した結果、④の逆のこととなったわけである。もちろん、S児も7月に入れば、N児と似たような状況にいたったのかもしれない。これまでに検討してきたように、N児の方が思い(情意表現)の記述を多くしていたと見ている。この7月17日の場合は、家庭で起きる出来事を、捉える対象としてしっかりと意識させ、リアルタイムに描写させることの有効性を示しているような気がしてならない。たとえ、文法的に正しくない書き方がところどころに混じっていても、文章構成の面で多少の難があったとしても、である。

注

- 1) 筆者としては、「たいがい」は誤植で、「たいぎい(面倒くさい・骨が折れる・くたびれてだるくなる等の意)」という俗語表現ではないかと推察する。
- 2) 論本文では、上記の初出について、文章によって説明されているが、筆者が表の形に変換した。
- 3) 亀村は、特に「自覚」という表現を使い、「特に子どもの個性が表われているような日記を、ほめたり認めたりすることや、日頃の一斉の日記指導によって、個性のあらわれるような日記を生み出させていきたいと思う。子どもは、自分の持っているすぐれたところを、書くことをとおして認め、それを伸ばしていこうとする自覚を持つようになるからである。〈下線は岡による。以下同様。〉(『日記指導』42頁、「I 日記指導のねらい 一なぜ、日記を書かせるのか」中の「5 個性をのばしゆたかにするために」にあるもの)」と、さらには、「子どもたちが日記を書き、その日記を指導することによって、子どもたちは、今まで気づけなかった生活を自覚し、心を動かすことの大切さを知り、生き生きとした目を、身のまわりに向けるようになる。ここに子どもの発達がある。子どもの心は、どんなに広いかどんなに大きい容れ物であるかは、子どもを教える者の知ることである。子どもの心を動かしてやらなければならない。そして、あくなく吸収しようとする心を育てていってやらなければならない。(『日記指導』48頁、「I 日記指導のねらい 一なぜ、日記を書かせるのか」中の「6 子ども自身の発達のために」にあるもの)」と述べているのである。ここで指導した担任教員は、亀村の存在を知っているわけではなかったが、無意識にそのエッセンスを汲み、体現していたと思う。
- 4) 12月から3月にかけては、データの保存がよくないため、ここでは省かせて頂くことにする。
- 5) ただし、『分類語彙表』に、この語はない。
- 6) 上記5)に同じ。

参考文献

- 亀村五郎. 1971. 日記指導. 百合出版.
国立国語研究所. 1964. 分類語彙表. 秀英出版.
岡 利道. 1994. 児童の日記に見られる述べ方について (I) — N. W. 児の1年生時の日記に見られる冒頭部分の表現に注視して — 「表現研究」第59号. pp. 39-50.
岡 利道. 1995a. 児童の日記に見られる述べ方について (II) — N. W. 児の2年生時

- の日記に見られる冒頭部分の表現に注視して一、「表現研究」第61号. pp. 8-17.
- 岡 利道. 1995b. 児童の日記に見られる述べ方について (Ⅲ)― N. W. 兄の3年生時の日記に見られる冒頭部分の表現に注視して一、「広島文教女子大学紀要」第30巻. pp. 11-26.
- 岡 利道. 1997. 児童の日記に見られる述べ方について (Ⅳ)― N. W. 兄の4年生時の日記に見られる冒頭部分の表現に注視して一、「広島文教女子大学紀要」第32巻. pp. 1-14.
- 岡 利道. 2000. 児童の日記に見られる述べ方について (Ⅴ)― N. W. 兄の5年生時の日記に見られる冒頭部分の表現に注視して一、「広島文教女子大学紀要」第35巻. pp. 151-170.
- 岡 利道. 2002. 児童の日記に見られる述べ方について (Ⅵ)― N. W. 兄の6年生時の日記に見られる冒頭部分の表現に注視して一、「広島文教女子大学紀要」第37巻. pp. 45-61.
- 田中瑩一. 1985. 日記の指導言が子どもの表現力をどう伸ばしたか. 「月刊国語教育研究」No. 158 (昭和60年7月号). pp. 3-7.